

# 龍門司坂

たつもんじざか



「加治木古老物語」から抜粋

一 今、此の町、寛永十二年六月七日見分有。鹿兒島より  
 今の龍門司街道ハ寛永十二年六月七日見分有。鹿兒島より  
 新納助海軍中尉二階堂誠之助殿 加治木より肥後土佐守・北村  
 平兵衛伊能和泉守長田仁左衛門立見分有之。同じ  
 平兵衛門・伊能和泉守・長田仁左衛門立見分有之。同じ  
 有六か倉、平兵衛門・伊能和泉守・長田仁左衛門立見分有之。同じ  
 月五日、有川平右衛門を以、江戸江波御上街道相直候。有川平右衛門  
 平兵衛門より江波御上街道相直候。有川平右衛門  
 事ハ佐上原より龍移、其後鹿府へ龍移後、八右衛門と申候  
 其後伊勢名を龍成、十兵衛殿先祖之由候。此だつともじ  
 海軍ハ本浦通石川より、當地小田村之内本上ヶ原を通り  
 舟を本林渡り、たつもんじざか、龍門司坂の上、城の大迫山を  
 五本奈扶護寺の上より、郷田之瀬の上、城の大迫山を  
 下り、口之町に出、里川の湊へ相通為申由候。だつともじの東  
 方、城の外堀より、落し高十七八間、横計間計有之龍門  
 之方城の外堀より、落し高十七八間、横計間計有之龍門  
 ケ瀬と申有り、古御におよぶさき、遠来近來人々の  
 今しばし、立寄り見る、瀬の白糸



この他の始良市の指定文化財については、ホームページをご覧ください。

長さ486.8m  
面積198.7㎡

【龍門司坂地形実測図】

## 大口筋・龍門司坂について

江戸時代の主要街道（薩摩では「街道」を「筋」と呼ぶ）のうち、鹿児島城下を起点として北上し、白銀坂を通り加治木で宮崎方面に向かう「日向筋」と分岐して、大口を経由して熊本へ続く街道を「大口筋」といいます。

龍門司坂は、加治木から霧島市溝辺につながる大口筋の一部で、加治木町高井田から加治木町小山田の毛上集落を結ぶ山道です。杉木立と木洩れ日、そして苔むした石畳の風情が美しい坂道で、石畳敷きの平均幅は約4m、最大幅は7mあり、全長は約1500mと考えられています。集落内にある両端部は舗装されており、現在は山間部の486.8mが当時の状態で残されて、観ることができます。

この石畳は、あまり段差をつけない石敷きが特徴で、斜面に敷かれた石畳がずれないように、縦に深く埋める石列を地形に沿って設ける工夫が施されています。また、傾斜の強い場所などには側溝を設けるだけでなく、雨水が1か所に集中してのり面を浸食しない工夫も随所に見られ、薩摩街道の中でも大規模に整備された古道です。

『加治木古老物語』によると、龍門司坂は寛永12年（1635）に造られました。私領である加治木島津家が寛永8年（1631）に創設されていますので、藩直轄地であった溝辺郷や加治木領であった竹子（たかぜ）地区と結ぶため、最初に手がけた大工事だったことでしょう。龍門司坂が造られる以前は蔵王岳の北側で郷田滝（ごうだのたき）横に道があったと書かれています。この古道は地形から推測して、馬も旅人も危ない急傾斜の小道だったと思われ、大量に物資を輸送することに適さなかったのでしょう。

『隅陽記』によると、元禄6年（1692）9月26日、龍門司坂が大きく崩れたために鹿児島から修理するよう命令があり、横川から474人、溝辺から580人、加治木から846人の作業員が動員されたと書かれています。

地元では古くから「大名坂」とか「だしもん坂」とか呼んでいましたが、いくつかの古文書によるとこの坂の名称として、「龍門司街道」、「だつもじ坂」、「龍門寺之坂」、「たつもんじ坂」などと表記され、近くに「往古龍門寺ト云寺有り、於テ云」と説明してある文書もあります。

龍門司坂の近くには敷設に使用した凝灰岩（ぎょうかいがん）、通称：樋ノ道石（ひのさこいし）の採石場があり、そこには加治木島津家第四代久門直筆といわれる「山神」の祠（ほこら）が、作業の安全を願って建立されています。この祠には「元文六年（1741）」という年号が刻まれており、敷石工事が行われた時期がわかります。おそらくこのころ、薩摩藩は領内において大規模な街道整備を実施したのでしょう。

加治木は栗野からえびの市につながる加久藤筋（かくとうすじ）や、そこから人吉地方へ続く球磨筋（くますじ）なども大口筋同様につながっており、古代から中世にわたり幹線道であった川内―蒲生―国分ルート上でもあって、また湊（みなと）では中世から海外貿易や、産物の積み出しも盛んに行われていました。人や物、情報、技術が行き交い、交易の街として繁栄してきた姿を、龍門司坂は伝えています。

明治10年2月、大勢の見送りの人々に送られ、西南戦争で熊本方面を目指した総数6000名とも言われる薩軍兵士がこの坂道を登っており、別府晋介に率いられた6番（加治木隊）・7番大隊は大口筋を通過して佐敷（熊本県芦北町）へ、西郷隆盛率いる本営は加久藤越えから人吉へ向かっています。

明治22・23年ごろに龍門司坂の東側に県道が造られて、幹線としての機能を終えることとなります。



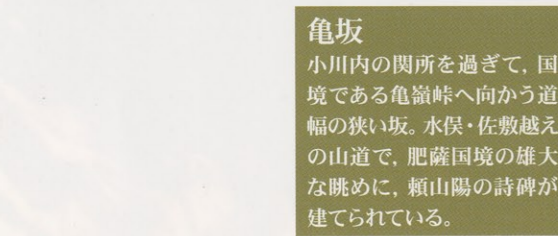
# 大口筋を中心とした近世の主要街道



**野間関**  
出水筋は肥後との国境警備が最重要任務であったため、関所の取り締まりも厳重であった。8人の関守が常駐し、出入国者や荷物を検査した。入国に3週間待たされた記録もある。



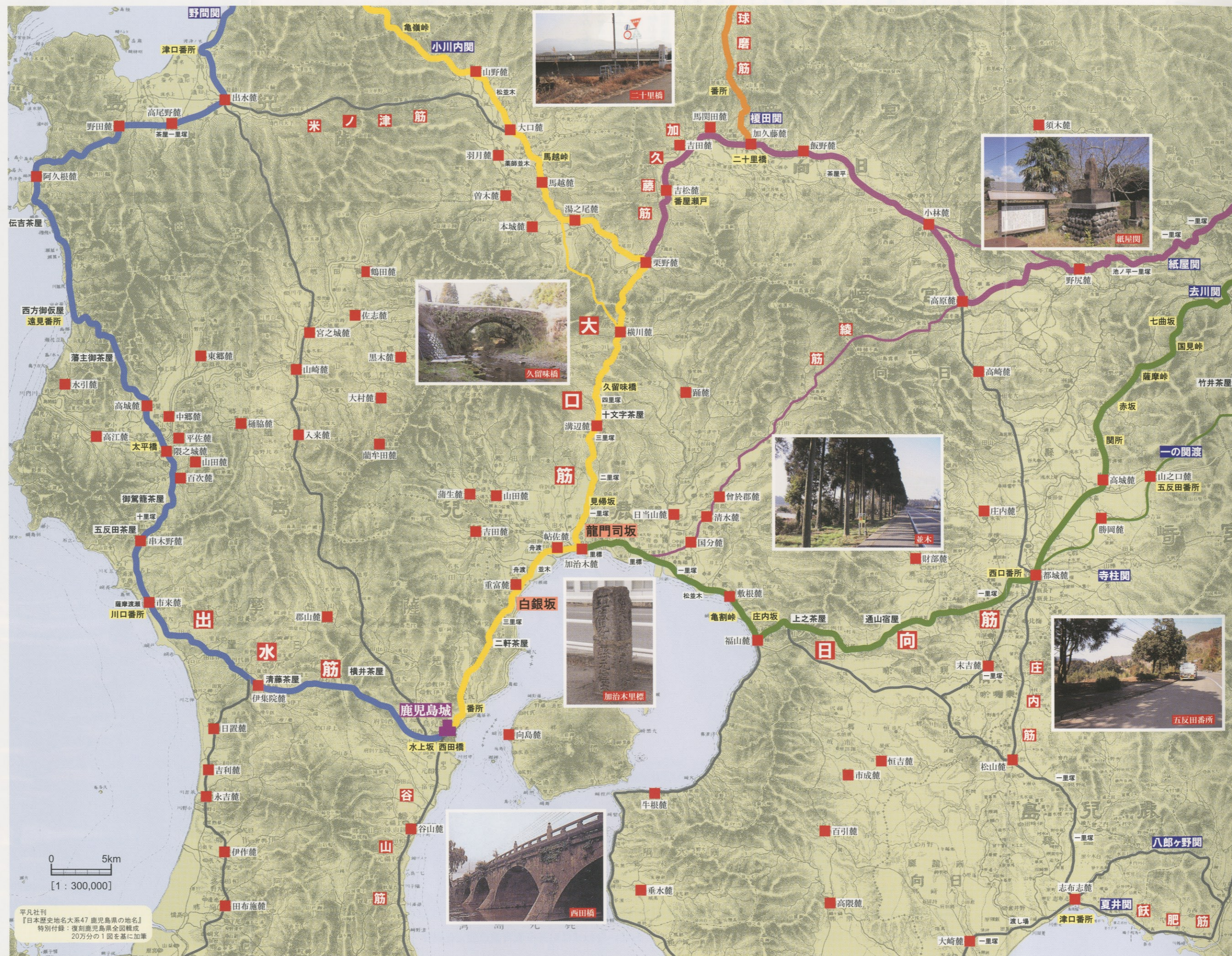
**白銀坂**  
薩摩国と大隅国の間に位置し、重富筋と吉野台地をつなぐ。高低差400m以上の急峻な石敷きの坂道で「大石兵六夢物語」にも登場する。



**亀坂**  
小川内の関所を過ぎて、国境である亀嶺峠へ向かう道幅の狭い坂。水保・佐敷越えの山道で、肥薩国境の雄大な眺めに、頼山陽の詩碑が建てられている。

私たちの先祖は、多くの苦勞を重ねて「道」を切り開いてきました。人が「道」を往来することで、「情報・技術・もの」が交錯し、経済や文化が向上して新しい時代が築かれてきました。「道」は物産が集散するだけではなく、兵隊や悪い病氣をもたらしたこともありました。しかし、それも後世に伝えたいいけない出来事です。利便性を追求し、物流や情報が高速となった現在、古道の存在は忘れ去られがちです。古道の周辺には「人の営み」が積み上げられ、その結果、有形・無形の文化財が多く残っています。人や物の交流の姿を伝える貴重な文化財として古道を復元し、保護する必要があります。

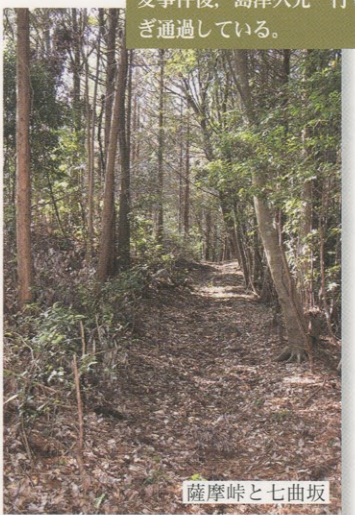
**小川内関**  
近くに馬番所があり、特に薩摩馬が領外へ出ることに厳しかった。地域の人々は、怪しい通行人を見つけたら通報する義務があったという。西南戦争の激戦地としても知られる。



**榎田関**  
相良藩球磨方面との往来を取り締まった関所で、「球磨口番所」とも言う。幕府隠密の侵入に警戒したため最も難所に道を通し、加久藤郷土が移住して警備にあたった。



**去川関**  
11代に渡り関所御定番を勤めた二見家屋敷や国指定の大イチョウが残る。他国者で重罪を犯した者は、去川で帰国を命じたが、関外で斬殺される決まりもあった。怪しきは斬殺、追返すなど旅人に恐れられたという。



**薩摩峠と七曲坂**  
道幅の狭い山道が続き、辺路番所から国見峠を過ぎると、去川関まで「難渋に御座候」といわれた七曲坂がある。生麦事件後、島津久光一行も急ぎ通過している。

**夏井関**  
通行を許可されなかった僧と娘が、辞世の句を残し身投げをしたといわれ、2基の供養塔が近くに残る。



江戸時代、薩摩藩の陸上交通における主要街道には、領外へ至る出水（西目）筋・大口筋・日向（東目・高岡）筋がありました。出水筋と大口筋は、肥後経由で豊前小倉につながり、日向筋は細島（宮崎県日向市）と結び、主にここから海路で大阪・江戸へ向かっていました。領外に面した街道には関所（国境には境目番所、途中には辺路番所）が設置され、不審な人や物が出入りしないよう厳重な取り締まりが行われていました。

また、鹿児島城下と各郷の拠点である「地頭仮屋」との速やかな連絡のため、並木の保護、茶屋や道標・一里塚の設置、架橋等の整備や保全も積極的に行われ、郷土の居住地である「麓」と「麓」を結びながら街道が整備され、やがて周辺には宿泊のできる野町や浦町も発達しました。

【参考資料】「宮崎県歴史の道調査報告書」「鹿児島県歴史の道調査報告書」「歴史の道整備活用推進事業総合計画報告書」